2021（令和 3）年度エリザベト音楽大学大学院の

博士学位論文、内容の要旨および審査結果の要旨について

学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条およびエリザベト音楽大学学位規程第 12 条により、次の者の博士論文内容の要旨及び審査結果の要旨を公表する。

氏　　名	楊卿
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	甲第 20 号
学位授与年月日	令和 4 年 2 月 17 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	A Piano Pedagogy for Late Beginners: Taking Adolescent Beginners as an Example
学位論文等審査委員	
（総合審査）委員長	教授　馬場有里子
	教授　垣内　敦
	教授　壬生千恵子
（演奏審査）委員長	教授　垣内　敦
	教授　柴田美穂
	准教授　志鷹美紗
	教授　馬場有里子
	教授　壬生千恵子
（論文審査）委員長	教授　馬場有里子
	教授　垣内　敦
	教授　壬生千恵子
	専任講師　中谷政文
	学外審査員　岩永　誠（広島大学教授）

論文内容の要旨

In contemporary China, many adolescents confront with studying music because of China's growing social-education culture, which encourages them to get knowledge and skills related to the arts, besides the children and young adults pursuing musical education. Moreover, China's College Entrance Examination-Supported Score Policy leads many adolescents to try to take their examinations as art "speciality students" and get a spot in China's best comprehensive universities. Furthermore, art-grade test in China is more and more popular nowadays. It has become a social phenomenon that many students seek to acquire a certificate to be more competitive in extracurricular classes. Also, the Chinese parents are eager for their children to be winners in the social competition; therefore, they send their children to study different skills, with piano study being the leading choice. For the reasons above, the number of late piano beginners is increasing significantly, and they are trying to find specialised education, exceptional

instructors, and effective pedagogies. Chapter I discusses these backgrounds in detail.

This research explores effective piano methodologies and scientific teaching strategies for adolescent beginners and includes several methodological dimensions. First, Chapter II reviews the physiological and several psychological characteristics of adolescents, which have the following aspects: hand bones, muscle strength, flexibility, motor skills, proprioception, and psychological factors. The physiological level is closely related to the performance posture, body coordination and relaxation of adolescent beginners. Then, to understand the condition of adolescent beginners practically, questionnaires were completed by Japanese and Chinese students and Japanese instructors in Chapter III. The survey can observe the problems arising from gender differences and the difficulties for adolescent beginners playing the piano. The result shows that age and gender differences greatly affect their piano learning, and physiological development significantly impacts them. Furthermore, the piano instructors' strategies for guiding adolescent beginners were summarised.

Next, in Chapter IV, the contents of piano pedagogy and method books of the past three centuries are carefully examined chronologically to extract practical proposals for adolescent beginners. It reveals that learning music theory, body coordination, and relaxation from the beginning is especially vital for adolescent beginners, which is consistent with the results of the previous two chapters. In addition, from the perspective of piano educators, this chapter reviewed the history of the contributions of such musicians as Hummel, Chopin, and Henselt in music education, unexpectedly founding the interaction effect of music schools.

In Chapter V, the scientificity of piano performance postures from the references mentioned above is verified via contemporary physical and physiological theories. It found that the external force that works on the player will eventually affect the performance of timbre, the extension of external forces in space, and simultaneously provide practical methods for studying scales, arpeggios, finger independence, body relaxation and coordination. These are the fundamental problems adolescent beginners need to solve at the start of piano learning. At the end of this chapter, some suggestions for piano practice are provided, including allocating piano practice time and repertoires.

Finally, Chapter VI concluded this dissertation and discussed future research and details. Moreover, the new point of this dissertation is that it has given an overview of piano performance from the perspective of physiology and physical mechanics and inspected performance practices from macro to micro, which is rare in contemporary pedagogies.

As scientific methods are and should be the trend in piano education development, this research aims to help instructors teach students with scientific concepts and help students practice effectively to enter the music world smoothly and enjoy the fun of music more. The author hopes each adolescent beginner could learn music with confidence and enjoy music in a relaxed mood.

審査結果の要旨

1．演奏審査

過去 3 世紀のピアノ教育の歴史において、奏法上どのような観点が重視されたかを紐解き、その時代に作曲された楽曲を考察することで、ピアノメソッドとその歴史を体系的に整理する研究を進めてきたのが楊卿さんである。修了リサイタルでは、彼が研究の過程において特徴的と感じた 3 つの興味深い楽曲を取り上げ、披露された。18 世紀末から 19 世紀にかけて活躍したシュタイベルト、ヘンゼルト、そしてフンメルの 3 人の作品から、姿勢や身体の動きに関する当時の教育法の記述を分析し、自らその実証を試みた印象である。

1 曲目にはシュタイベルトの『50 の異なる様式の課題を含む練習曲』作品 78 より「第 20 曲ホ短調」を取り上げた。シュタイベルトはベートーヴェンと同世代であり、ツェルニーからも高く評されたこの練習曲は、楊さんの説明によると 19 世紀の終わりまでは標準的な教材として使用されていたとのこと。演奏された「第 20 曲」は、右手に和音のトレモロや音階、トリルが多用され、同時に左手は陰鬱ながら激しく旋律を歌わなければならないため、プログラムの 1 曲目としてはかなりの度胸と技術を必要とするが、多少の硬さがあったものの、単純にテクニックで誤魔化すことなく丁寧に音楽作りをしていたのは好印象であった。2 曲目にはヘンゼルトの『12 の演奏会用性格的練習曲』作品 2 より「第 3 曲」が演奏された。のちのスクリャービンやラフマニノフにも影響を与えたとされるメランコリックな曲想で、高音部の美しい旋律とそこから低音部へ向けて流れ出るアルペジオ音型によるハーモニーの色合いが丁寧な音色で表現されていた。楊さんの演奏からは、柔らかな腕の動きへの意識が見られ、自らの研究で得た奏法を確かめるような印象を受けた。音楽的にも非常に落ち着いて安定感を見せていた。最後の 3 曲目にはフンメルの『ソナタ第 5 番』作品 81 が取り上げられた。譜面を見ると卒倒してしまいそうな超絶技巧が盛り込まれた大曲であるが、修士課程時代の楊さんの演奏を知る審査員には、この数年での音楽表現力の成長が顕著に感じられ、技術的にまだ難しい面はいくつか否めないにしても、技巧的な箇所においても決してテクニックのみで音楽を処理しない楊さんの努力をしっかりと認めることのできる演奏内容であった。

研究テーマの影響からかどうしても技巧的な曲に偏ったプログラムではあったが、それでも音楽的素養を十分に感じる演奏内容であり、博士号授与に十分値する演奏能力が認められるとして、審査員全員の合意を得た。

2. 論文審査

本論文は、中国で近年急増する開始年齢の遅いピアノ学習者のための、科学的、効率的な指導法の探求を目的としたものである。この背景には、激しい競争社会における芸術教育ブームの過熱と、検定試験合格者に対する大学入試での特別優遇制度があり、中国のピアノ指導現場では、こうした開始年齢の遅い学習者に対する効果的指導法の開発が喫緊の課題とされている。

自身も中国で比較的遅い年齢からピアノ学習を始めた経験と、四川師範大学で生物科学を専攻した経歴をもつ執筆者は、本論冒頭となる第 2 章でまず、10 代からのピアノ学習開始者の身体生理学的特徴および心理的特徴を整理、紹介している。第 3 章では、日中のピアノ学習者約 640 人と日本のピアノ指導者 41 人に行ったアンケート調査、およびピアノ・レッスン見学と教師へのインタビュー結果がまとめられ、続く第 4 章で、18 世紀から 20 世紀に書かれた鍵盤楽器の代表的指導書 35 点を取り上げ、指導法や奏法等の変化を概観、整理している。そのうえで、最後の第 5 章で青年期からのピアノ学習者に対する合理的、効果的な指導の可能性が検討され、正しい演奏姿勢などの力学的分析による説明、音階・アルペジオ、指の独立性などに関する生理学的視点をふまえた指導法や練習法の再整理と提案が行われている。

第 3 章で示された日中でのアンケート調査と分析結果は、特に日本における調査範囲の限定性や、分析の基準とする年齢設定など粗削りな部分はありながらも、全体として、学習者が認識する課題の一般的傾向の把握に資するものとなっている。さらに、指導者側の認識を併せて調査、提示したことは、両者の認識の一致点のみならず相違点も浮かび上がらせた点で興味深く、本研究における独自の貢献として一定の評価が与えられるものである。第 4 章での、多大な労を窺わせる、過去 3 世紀の指導書の丁寧な読解、整理もまた、資料研究、歴史研究としての意義に加え、有効性が再評価される練習法の抽出につなげられている。

一方、第 5 章での記述においては、演奏時の基本姿勢など、既に一般通念として定着している事項に対する力学的・心理的観点からの有効性の再確認や、既存の練習・指導法や奏法の紹介にとどまるところも多く、物足りなさが残った。これについては、音楽大学内で行う研究の限界でもあり、

今後、筋電図を用いた計測や動作解析などを含めた、より本格的な実験・実証研究が求められるところである。また、本章で指摘・提案された事項には、学習開始年齢に関わらない全般的なものも多く、開始時期の遅い学習者に特化した指導・練習法については、さらなる精査が必要となろう。推奨練習曲の具体的選定においても、ピアノ教員から質問のあった難易度設定の妥当性の問題を含め、より詳細な検討を行っていく余地がある。

本研究は、開始年齢の遅いピアノ学習者が抱える困難克服への執筆者の切実な願いと、真摯な努力によって進められたものである。本論文の目的に掲げられた、青年期からのピアノ学習者ならびに指導者に対する“gospel（福音）”の実現に向けては、今後なお多くの課題が残されていると言えようが、第2章における具体的課題の洗い出しは、中国での現状に即して現実的な一歩をなすものであり、他章での身体生理学的知見や過去の指導書の内容の整理・検討を含め、総合的に、今後の研究発展への足掛かりをなす基礎研究としての意義が認められると判断された。

3. 総合審査

以上、演奏審査と論文審査の両方を鑑みた総合審査において、本研究における社会的意義および基礎研究としての一定の学術的貢献が認められるとの判断から、全員一致で「博士(音楽)Doctor of Musical Arts」の学位を授与するに値するものと判定された。